

娘救う思いで医療機器開発

成長には資金が不可欠



心臓の働きを助けるIABP(大動脈内バルーンパンピング)バルーンカテーテルを国内で初めて製品化。血管を傷付けず安全であるため医療現場で広く使われ、狭心症や心筋梗塞の多くの患者を助けている。

その開発のきっかけは「娘を救いたい」という強い思いだった。次女の佳美(91年)には、国などから助成金

「娘を救いたい」という強い思いだった。次女の佳美(91年)には、国などから助成金

東海メディカル
プロダクツ会長

筒井 宣政氏(77)



を受けるために東海メディカルプロダクツを設立。努力を重ね人工心臓の動物実験に成功した。

その後、資金不足で開発を断念せざるを得なくなり、代わりに当時は米国製しかなく医療事故が多かったIABPバルーンカテーテルの開発を開始。人工心臓の開発で培った知見も生かし、たった1年半で作りに上げたのは医療関係者などから驚かされたという。

91年12月、佳美さんは23歳という若さで亡くなった。「優しい娘で、

生前は本人が重い病気のなかに、病院で使ってもらったことが決まるたびに『また一人患者さんの命を救ったのね』と喜んでくれた。娘に使っても安全な医療機器を開発しようという強い思いが、『一人でも多くの生命を救いたい』という企業理念につながっている」と話す。

取引金融機関は三菱UFJ銀行、瀬戸信用金庫。「企業が成長するためには資金が重要。三和ベンチャー育成基金の助成金などのおかげで開発できた」と感謝。(名古屋)
(文・写真)野田 宜邦

